

(算数科)

伝え合い、わかる喜びを感じる授業の創造

大阪市立瓜破西小学校 研究部

1. はじめに

平成25年度より算数を研究教科に様々な実践に取り組み、試行錯誤の中で研究を進めてきた。昨年度の研究では、「自ら学ぶ主体的な学習」と「共に学び合う授業づくり」に課題が残った。本校の児童は、自分の考えを発表することはできるが、一方通行で学び合いが不十分なところがある。そこで、今年度の研究主題を「伝え合い、わかる喜びを感じる授業の創造」とし、学習の土台となる生活指導や学習規律から見直し、算数の研究を中心に据えながら、他の教科や学級指導においても指導を進め、その確立を目指すこととした。

研究討議会では、ワークショップ型の討議会を取り入れ、全教員が研究の視点に基づいて積極的に忌憚のない意見を述べるようにしたり、若手教員がグループ討議の内容を発表するようしたりして、教師自身の発表力が向上するよう努めてきた。また、全員研究授業に加えて年次研究授業や自主研究授業を行い、授業力の向上を目指している。

2. 研究の内容

子どもが意欲を持って課題に取り組み、主体的に追究しながら解決を図っていくことができるように、大阪市小学校教育研究会算数部の研究を参考にして、「自ら学び続ける子ども」を育てるために「出会う」「気づく」「考える」「振りかえる」「活かす」の5段階の学習過程を基本に据えた授業を一昨年前から展開してきた。今年度も継続して5段階の学習過程を実践し、習熟度別少人数指導での授業構成や個別の支援のあり方などの指導法について工夫する。

(1) 学習規律の確立

○学級経営の充実 ○ハンドサインの継続

(2) 児童の興味・関心に応じた課題の設定

○身近な事象を教材にする工夫 ○児童主体の課題設定

(3) 自分で考え、学び合う過程を盛り込んだ授業構成

○児童の積極的な活動を引き出す発問や助言の精選

○多様な考え方を試すことができる活動時間の確保

○他者との学び合いを通して、よりよい解決の方法や考え方を生み出す授業

(4) 板書の工夫とノート指導の徹底

○掲示物や板書形式の統一 ○学習過程が明確になるノート形式の統一

3. 研究のまとめ

(1) 研究の成果

①学習規律の確立

○発表するだけでなく、発表を聞くことにも力を入れてハンドサインを活用した指導をしてきた。その結果、友達の意見を傾聴する態度や自分の考えと比較しながら聞く態度が身につくようになった。また、同調のハンドサインを見て自信を持って自分の考えを発表・交流できる児童を増やすことができた。

②児童の興味・関心に応じた課題の設定

- 具体物を使った算数的活動を中心に授業を展開したことで、児童の興味・関心が高まった。体験的学習を通し、算数を楽しいと感じる児童を増やすことができた。
- ICTを活用し、児童が身近に感じる事象を問題として取り扱うことで、意欲的に学習に取り組めるようになった。学習課題に必然性を持たせることで、身に付けたことを生活の中で活用しようとする意識が高まった。
- 5段階の学習過程を基本に据えた授業を継続したことで、児童が問題解決学習を積み重ねることができた。学習課題を児童の言葉で設定できるようになってきた。

③自分で考え、学び合う過程を盛り込んだ授業構成

- ふき出しカードを活用して、考え方の見通しを教師が整理しながら板書することで、問題解決に関するキーワードを学級で共有することができた。
- 見通しを持つ際や自分の考え方をノートにまとめる前など、様々な場面でペアや班で簡単な交流を行うことにより、友達の意見を参考にしながら意欲的に学習に取り組むことができる児童が増えた。

④板書の工夫とノート指導の徹底

- 一定の型を作りノート指導に取り組んだ。ノートを見れば今日の学習の流れや習得したことがわかるようになり、既習事項の確認に活用することができた。
- 重要な数やキーワードをメモで書き残すよう指導を行った。計算過程や思考の流れが分かるように、矢印や線を使って考え方を整理できるようになってきている。

⑤その他

- 年間を通して、習熟度別に学習ができる環境作りを行った。コースを担当する教員や児童をある程度固定することにより、児童の実態に基づいた授業づくりができ、児童理解が深まった。
- レディネステストを活用して児童の実態を分析し、学習内容の関連や定着していない学習を把握するように努めた。さらに、各部会で教材研究を深め、指導案の検討を繰り返す、児童の実態に合わせた授業づくりができた。

(2) 今後の課題

- 算数に関する正しい用語を使いながらお互いの考え方を交流し、理解を深めることができるようにする。そのためには、教師の発問や助言、指示などをみがいていきたい。
- 友達の意見を自分の考えと比較しながら、その場に応じたハンドサインを使い分けられる児童に育てるために指導を工夫する必要がある。その場の状況や思考の流れを考えずに自分本位で発言するのではなく、学習の規律やルールを確立させ学級全体の思考が深まるような学び合いの場にしていくことが大切である。
- 児童の自発的な取り組みを引き出すような発問や、学習課題を自分の力で解決できるようにするためのヒントカードを作成するなど、具体的な手立てを準備することが必要であった。
- 全児童が自力で問題解決に取り組めるようにするために、見通しについての考え方を交流する場面を設定し、自分なりの見通しをもてるようにする必要がある。問題提示から課題設定までの時間を短縮させる授業構成の工夫が求められる。また、児童から出された多様な考えを交流させながら、発表内容を整理してわかりやすくまとめ、より深い理解につながるように工夫する必要がある。